平城宮跡資料館二〇一〇秋期特別展

天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて　解説シート　付録

展示期間
Ⅰ　二〇一〇年　九月二五日(土)―一〇月一一日(月)
Ⅱ　一〇月一三日(水)―一〇月二五日(月)
Ⅲ　一〇月二七日(水)―一一月　七日(日)

【木簡が見つかった遺構】

（遺構番号順。年は展示木簡の出土年で、その遺構の全ての調査年を示すものではない）

SK二一九（第四室 241 248 251）　重要文化財　一九六一年

平城宮中央区の第一次大極殿院の跡地に建てられた西宮の北側に展開する役所のゴミ捨て穴。東西三m、南北三・五m、深さ一mの北半と、東西三m、南北二・五、深さ一mの南半分とからなる。平城宮跡最初の木簡出土地として名高い。天平宝字末年頃（七六〇年代前半）の遺物を中心とする。この遺構出土の木簡群は、同じ役所内の井戸SE三一一出土の木簡とともに、平城宮跡大膳職推定地出土木簡として、二〇〇三年に木簡では初めて重要文化財に指定された。

SK八二〇（第二室 9～12、第三室 126 127、第四室 215 233 244 246 253 254 256 262 263 265 267）　重要文化財　一九六三年

内裏の北東に位置する北外郭官衙西辺に掘られた方形のゴミ捨て穴。一辺約四m、深さ約二・三m。七四五年の平城遷都後のこの地域の再整備に関わるゴミを投棄した土坑で、七四七年（天平十九）頃に埋められたとみられる。平城宮跡で最初に千点規模の木簡群が見つかった遺構。内裏北外郭出土木簡として、二〇〇七年に重要文化財に指定されている。

SK八七〇（第四室 232）　重要文化財　一九六三年

内裏の真北に位置する内膳司と推定される役所の東辺で見つかった不整形のゴミ穴。東西五m、南北五m、深さ一・三mある。

SK二一〇一（第三室 125 155、第四室 249）　重要文化財　一九六四年

内裏の真北に位置する内膳司と推定される役所のうち、東半の広場部分で見つかった密集するゴミ穴の一つ。周辺にはいくつものゴミ穴が重複して掘られ、井戸の南西側の作業場兼塵芥処理場のような様相を呈していた。そのいくつかから木簡が出土した。SK二一〇一は、東西三・五m、南北三・四mの方形。SK八七〇・二一〇二・二一〇七木簡とともに、平城宮跡内膳司推定地出土木簡として、二〇一〇年に重要文化財に指定された。

SD二七〇〇（第三室 168、第四室 214）　一九六五年

平城京の北東に位置する水上池の南西部に端を発し、内裏東辺を南流して今の排水を集める基幹排水路。上端幅二・六m、下端幅約〇・七m、深さ一・五m。内裏東辺では石の護岸をもつが、それより南では一部に木杭による護岸がみられる程度となる。東区朝堂院・朝集殿院東辺の東方官衙のどこかの地点で東に折れ、SD三四一〇に接続していたとみられるが、その地点は未詳。内裏周辺では、天平期以降の多量の遺物が層位的に堆積していることが知られている。

SD三四一〇（第二室 23～27、第四室 216～226）　一九六五年

造酒司の井戸の排水を流すために役所の西辺に位置をずらしながら何度か掘られた南北溝の一つ。幅約〇・七m、深さ約〇・二m。南端は造酒司南限の築地塀を暗渠で抜けて宮内道路の側溝に接続する。敷地内では奈良時代を通じて淀み状に広がり、ゴミも投棄されて湿地状を呈していたとみられる。

SD三一三六（第三室 133）　一九六五年

東院西辺近くの南北溝。斜行溝SD三一五四に「く」の字型に取り付い

て南に流れる南北溝ＳＤ三一五五の上部には、後にゴミ処理用の土坑ＳＫ三一三七・三一三九が掘られるが、そのすぐ東に掘られた素掘りの南北溝がＳＤ三一三六である。幅〇・八ｍ、深さ〇・一ｍで一九ｍ分を検出した。

ＳＤ三一五四（第四室**264**）　一九六五年

東院西辺北部を北東から南西に斜行して流れる素掘りの溝。幅一・四ｍ、深さは約〇・四ｍ。西端で素掘りの南北溝ＳＤ三一五五に接続し南流する。

ＳＤ三一五四付近整地土（第四室**257**）　一九六五年

ＳＤ三一五四付近には三層の整地層がみられる。**257**はＳＤ三一五四が埋まった後に造成された整地土に含まれていた。

ＳＤ三一九七（第四室**230**）　一九六五年

東院西辺には、三条の南北溝が流れる。最も東にあるのがＳＤ三一九七、ついで西へ二三ｍの位置にＳＤ三一三六、さらに西へ一七ｍの位置にＳＤ三四一〇がある。ＳＤ三一三六とＳＤ三一九七の間は東一坊大路の北への延長部にあたるが、ここには建物や井戸が密に設けられている。ＳＤ三一九七は幅約・二ｍ、深さ〇・二ｍあり、部分的に玉石積みの護岸が残る。

ＳＤ三四一〇・ＳＤ二五〇（第一室**2**、第四室**252**）　一九六六年

ＳＤ三四一〇は、平城宮跡東院と東方官衙の間の宮内南北道路の西側溝。幅三・四ｍ、深さ〇・五ｍ。小子門以南は東面大垣内側（西側）に沿って流れ、宮東南隅で西から東西溝ＳＤ四一〇〇を合わせたあと、南面大垣を暗渠で抜け、二条大路北側溝ＳＤ二五〇に合流する。**252**が出土したのはこの付近。ＳＤ二五〇は、ＳＤ三四一〇との合流後さらに東流し、東面大垣東側の東一坊大路西側溝ＳＤ四九五一に注ぎ込む。するこの付近は、平城宮東部の排水が集まる地域であり、上流部から流れ下ってきたものも含まれる。従って、有数の木簡出土地になっている。

ＳＤ四一〇〇（第二室**37**38**39**40、第三室**152**153、第四室**258**259**260**）　一九六六年

平城宮東南隅の南面大垣内側を東に流れる東西溝。幅最大六ｍ、最深一ｍ。東面大垣内側の南北溝ＳＤ三四一〇に合流する。木簡は、式部省の勤務評定に関わる削屑が大半で、養老・神亀年間（七一七～七二九）から宝亀元年（七七〇）のものまでを含むが、養老・神亀年間のものは南面大垣を横断する南北溝ＳＤ一一六四〇と一連の遺物とみられ、ＳＤ四一〇〇の木簡は基本的に宝亀元年頃に一括して投棄されたとみられる。なお、宝亀年間頃に北側に移転してきたとみられる神祇官関連木簡も、僅かに含まれる。

ＳＤ四七五〇（第二室**53**～**60**98～**107**、第三室**124**134**149**150**156**169、第四室**227**228**229**231**234～**240**243**245**247**250**268）　長屋王家木簡　一九八八・八九年

平城京左京三条二坊一・二・七・八坪で見つかった左大臣長屋王の邸宅のうち、八坪東南隅に東面築地塀の内側に沿って掘られた南北溝状のゴミ捨て土坑。幅三ｍ、深さ一ｍ。総延長は約二七・三ｍ。平城遷都からまもない時期の、貴族の家政機関の資料という他に類例のない木簡出土した。長屋王が式部卿を務めていた七一六年（霊亀二）後半の、邸内における米支給の伝票木簡を主体とする。

ＳＤ四九五一（第四室**242**）　一九六七年

東院西辺の排水を集める溝で、小子門の西側から宮外へ出て、東一坊大路の西側溝となる。幅一・三ｍ、深さ〇・九ｍ。二条大路北側で西から流れてくる二条大路北側溝ＳＤ一一五〇を合わせ、さらに京内を南流する。京内の道路側溝としては最も多くの木簡が出土しており、宮近辺だけでなく、七条でも千点規模の木簡の出土が知られる。**242**は、小子門の脇を通って宮外へ流れ出た、平城宮東面の東一坊大路西側溝部分から出土した。

ＳＤ五一〇〇（第二室**76**108、第四室**266**）　二条大路木簡　一九八八・八九年

平城京左京三条二坊八坪（光明皇后宮。旧長屋王邸）と二条二坊五坪（藤原麻呂邸）の間の二条大路上の南北両端に掘られた濠状の遺構のうち、皇后宮の北門から八坪北辺築地塀に沿って二条大路南端に掘られた遺構。幅二・六ｍ、深さ〇・九ｍ。総延長約一二〇ｍ。

ＳＤ五三〇〇（第二室**75**77～**80**、第三室**151**154**157**、第四室**255**261）　二条大路木簡　一九八九年

平城京左京三条二坊八坪（光明皇后宮。旧長屋王邸）と二条二坊五坪（藤原麻呂邸）の間の二条大路の南北両端に掘られた濠状の遺構のうち、藤原麻呂邸南門前から東に二条大路北端に沿って延びる遺構。幅二ｍ、深さ一ｍ。総延長約五八ｍ。西端の門前から、藤原麻呂の家政機関に関わる木簡が集中して見つかった。